

第六十八號 明治三十八年六月十二日海軍技手木口吉五郎ノ提出セル竹島視察報告

リヤンコールド岩ハ巒陵島ノ東方ヨリ稍南方ニ偏シテ東西ノ二島ニ分ル兩島間ノ距離約百六十五尺ナリ西島ハ海上ヨリ高サ約四百十餘尺ニシテ斷崖絶壁宛モ劍ヲ立テタルカ如ク到底絶頂ニ攀登スル能ハス且平地等モ見當ラズ材料物品ノ運搬モ出來難キヲ見ル東島ハ海面ヨリ絶頂迄約三百二十五尺ニシテ中央ニ高サ六尺ヲ開鑿セハ望樓員詰所トシテ適當ナル位置ヲ求メラルヘク又是ヨリ東方約三十間ノ處ノ高地ハ信號旗竿及ヒ見張所等ヲ建設スルニ適當ト思料ス以上ノ狀況ニヨリ判斷スルニ望樓建設ニハ東島ヲ以テ適當ト存セラレ候條此段御參考迄ニ意見上申候也

第六十九號 明治三十八年六月十四日第三艦隊司令官海軍少將武富邦鼎ノ提出セル竹島視察報告

一、小官ハ第三艦隊司令長官ヨリ橋立ヲ率井佐世保鎮守府ヨリ派遣セル建築科員ヲ便乘セシメ之ヲ竹島ニ送致セシムルト同時ニ同島ニ假設望樓設置方適否ノ判斷ニ任スヘシトノ訓令ヲ受ケ十二日午後竹敷ヲ出發シ翌十三日午後二時著シ直ニ建築科員ヲ同島ニ送ルト同時ニ橋立艦長ニ命シ將校ヲ派遣セシメ之カ視察ヲナサシメタリ

二、艦上ヨリ視察スル所ト橋立艦長報告竝ニ建築科技手ノ報告トヲ綜合シテ東西兩島ヨリ成ル竹島ニ假設スヘキ望樓建設ニ關シ左ノ意見開陳ス

(イ)西島ハ東島ヨリ稍高ク約四百十餘呎ナルモ四周斷崖絶壁ニシテ到底攀登スル能ハス又望樓ヲ設置シ得ヘキ餘地アルヲ認メス且視察當日雲霧共ノ頂上ヲ隱蔽シアリシニ微スレハ假令望樓位置ヲ其ノ頂上ニ置キ得ルトスルモ雲霧ナキノ日ニアラサレハ常ニ視界ノ妨害ヲ免レサルモノト推判ス

(ロ)東島ハ西島ヨリ稍低ク且小ナルモ尙高サ約三百二十五呎ニシテ頂上ニ近ク望樓建設ノ餘地アルノミナラス共ノ南方ハ稍斜面ヲナシ且西方ハ凹岸ニシテ小灣形ヲナス此ニ小舟ヲ附クルヲ得テ交通ノ便アリ唯望樓位置ヨリ方位西北西ヲ中心トシ左右二三十度位ノ間視界ヲ西島ニ遮斷セラル、ヲ憾ム然レトモ西島頂上ノ如ク雲霧ノ爲メ隱蔽セラル

ルコトハ少キモノト信ス

以上ノ狀況ニヨリ望樓建設ノ位置ハ東島ヲ以テ適當ナルモノト認ム

三、望樓ノ設計裝置

望樓ノ設計裝置方法ニ於テハ建築科技術ノ設計ヲ以テ適當ナルモノト認ム

右設計ニハ岩石ヲ掘リ下ケ望樓員詰所アリ其ノ内ニ水罐蒸溜水器糧食薪炭貯藏所アリ又別ニ見張所旗竿(旗竿ハ起伏
自山ノ裝置)等
アリ其ノ詳細ノコトハ此ニ略ス

四、望樓員生活ノ難易

(イ)竹島ノ如キ孤島ニ於テ生活ニ最必須ナルモノハ飲料水ナリ之カ供給ニ適應ノ蒸溜器ヲ裝備シ且數箇月分ノ糧食ヲ貯藏セシメ而テ月ニ一回若クハ二回汽船ヲ派シ之カ補給ヲナサハ敢テ本島望樓員ノ生活ニ於テ左程困難ハアラサルモノト認ム現ニ本邦ノ漁夫數十名同島ニアリテ海豹捕獲ニ從事シ居レリ其ノ言ニ徴スレハ彼等ハ毎年中旬頃ヨリ八月中旬頃ニ至ルノ間毎月一回隱岐島ヨリ和船ヲ以テ交通シ糧食ノ補給ヲ受ケ此ノ島ニ生活シ居ルト云フ

(ロ)初メ荒天ニ際シテ或ハ怒濤全島ヲ洗ヒ人類ノ住居生活ニハ適セサルヤノ疑念アリシモ今視察スル所ニヨレハ相當ノ設計ヲ以テセハ左程ノ困難ニアラサルモノト知了セリ

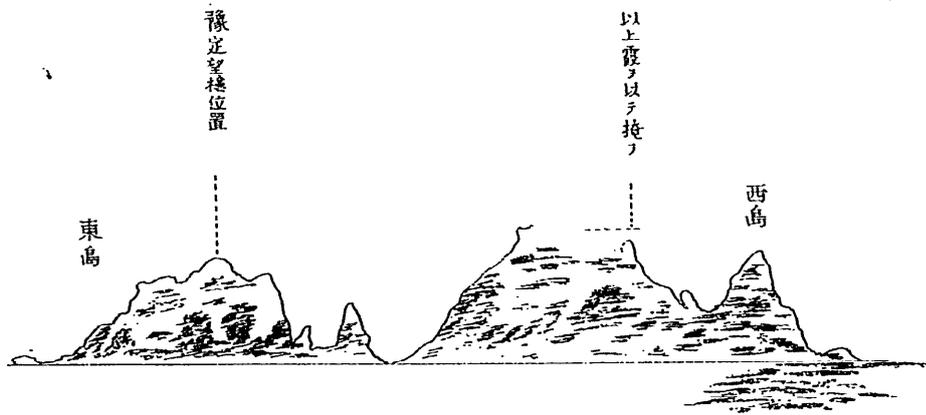
五、望樓員ノ保護

保護ノ點ニ於テハ望樓ノ建設ヲ堅固ニスルコト内地ト汽船交通ノ便ヲ計ルコト等ナリ唯洋中ノ一孤島ニシテ海上平穩ナル日ニアラサレハ小汽船ノ交通ハ隨分困難ナルヘシ殊ニ冬季中日本海北風烈シキ季節ニ際シテハ一層ノ困難アルヘシ依テ此ノ季節ニ處スルノ方法ヲ講シ以テ十分ニ之カ設備ヲ爲スノ必要ヲ認ム

六、別紙見取圖橋立艦長報告竝ニ建築科技術報告望樓豫定位置圖ヲ添附ス

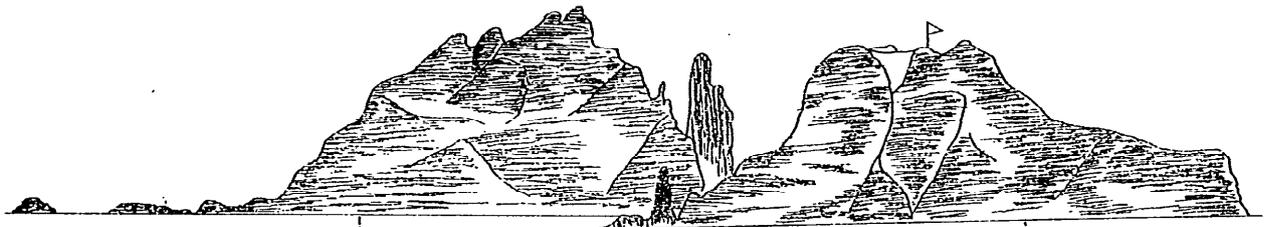
(編者曰ク橋立艦長及ヒ建築科技術ノ報
告書ハ第六十八號及ヒ第七十號ニ掲ク)

見取圖





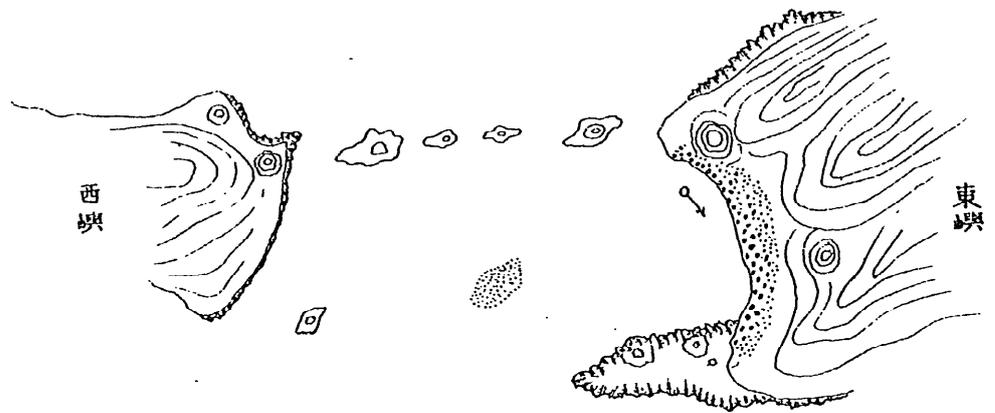
410 頂ヲNNW 4'ニ見ル

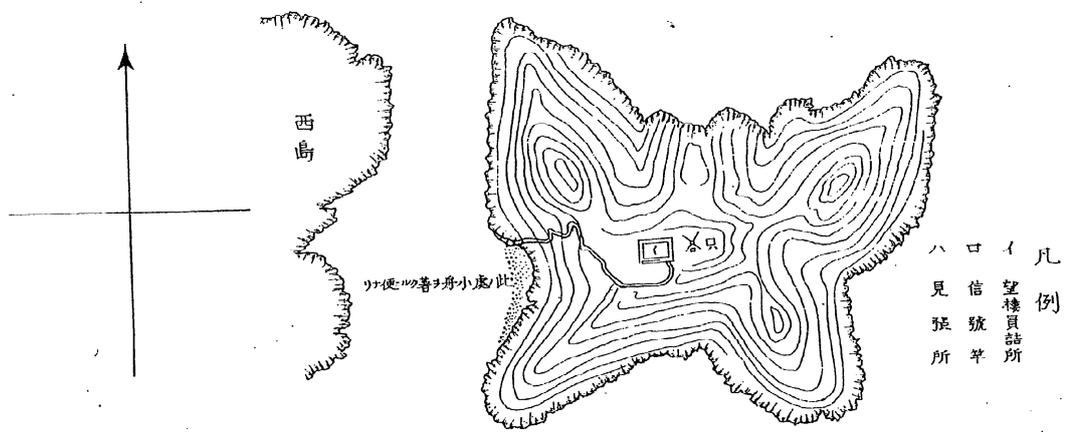
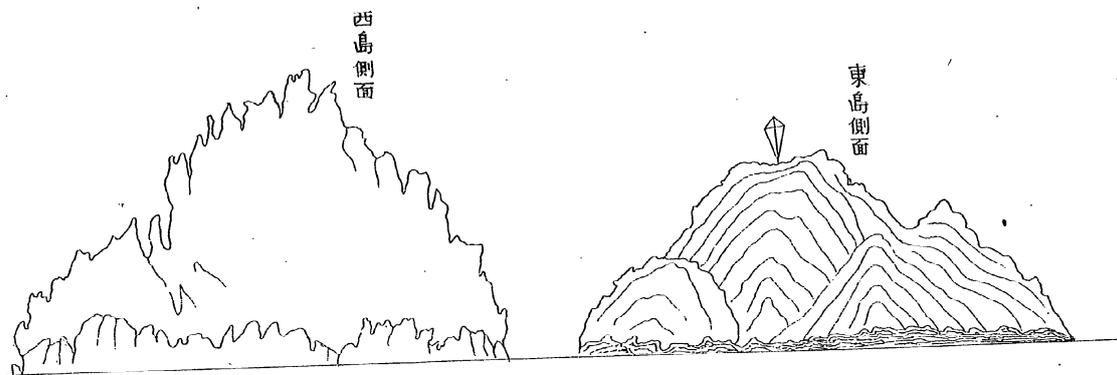


西嶼

東嶼

西嶼中間上陸揚ヲ望ム





第七十號 明治三十八年六月十五日橋立艦長海軍大佐福井正義ノ提出セル竹島觀察報告

命ニ因リ明治三十八年六月十二日竹敷ヲ發シ十三日午後二時竹島東嶼ノ東端約一哩ニ達シテ漂泊シ即時端舟ヲ舩シ航海長小倉大尉及ヒ其ノ從屬森田中尉ヲ派遣シ望樓設置適否ノ調査ヲ命ス此ノ一行中ニハ豫テ佐世保鎮守府ヨリ派遣セル技手職工等ノ一行ヲ含有セリ右派遣將校ノ調査概要左ノ如シ

一、竹島ハ二座ノ列岩ヨリ成ル礮礮不毛ノ小嶼ニシテ西方ニ位置スルモノハ大ニシテ且高シ(海圖標高四百十呎)然レトモ四圍皆斷

崖絕壁ニシテ攀登スヘカラス加之嶼上平坦ト認ムヘキ地ナク都テ峻險ナル岩峰屹立シ望樓設置ノ望絶モテナシ

東方ニ位置スルモノハ前者ヨリ稍低シト雖モ(三百二十五尺ヲ概測シ得タリ)峻險ノ度少シク緩ニ且辛ウシテ攀登スルコトヲ得ヘク嶼

上皿狀形ノ如キ稍平坦ナル地面アリテ多少ノ土工事ヲ施セハ造營物ヲ建設シ得ヘシ

一、建築材料ノ陸揚ケ竝ニ頂上ヘノ運搬ハ辛ウシテ爲スコトヲ得先ツ陸揚場ニ就テ言ハンカ別紙見取略圖ニ示スカ如ク東西ノ二嶼ハ四座ノ小立岩一條ノ礮礮ニ因リテ連結セラレ其ノ長サ約一鏈(水路諸ニハ二鏈半トアリ)礮上ノ水深ニ尋乃至三尋ニシテ優ニ小舟ヲ通スヘク又四座ノ立岩ハ恰モ波濤堤ノ用ヲ爲シ東嶼ヨリ西走スル突角ト相待テ小港ヲ形成シ小船舟ヲ繫維スルノ便アリ但偏西風ニ對シテハ全ク暴露シ船舟ヲ繫維スヘカラス

此ノ小曲灣ハ東嶼ニ對スル唯一ノ陸揚地點ニシテ濱岸小平地ニハ現ニ獵夫ノ結作セル數箇ノ納屋アリテ三十有餘人是ニ假住ス

山上ヘ材料ヲ運搬スルニハ「デリック」リフノモノヲ以テスルヲ便利トスヘク斷崖攀登ヲ要スル箇所ニハ索梯ヲ用フルモ亦一法ナランカ

一、西嶼頂上ヨリ落チ來ル一小流脈アレトモ鹽分多量ニシテ口ニスヘカラス且試驗ノ結果到底飲料ニ適セサルコト別紙軍醫ニ依リテ爲サレタル試驗表ノ如シ

一、望樓員ノ副食ニ供スヘキ蔬菜培植ノ如キモ無論不可能ナルヘシト信ス如何トナレハ嶼上礮礮ニシテ殆ト土壤ト名

クヘキモノナク且降雨少ケレハナリ

以上ハ派遣將校ノ視察スル所ニシテ此ノ派遣中本艦ハ島ノ周圍約一哩ヲ隔テ一周ヲ試ミタレトモ別ニ暗礁等ノ觸目スルモノナカリキ但東嶼ノ北東端ヨリ一礁脈走出シ其ノ長サ約二鏈ト目測シ得タリ

本島ハ目下海驢(The Seal)ノ獵季ニシテ隱岐國ヨリ渡來ノ獵夫(ザロ漁夫 ナラン)三十五六名ニ達シ小銃ト網器トヲ用ヒテ海驢ヲ捕フ其ノ獵獲ノ豊富ナル見ルニ足ルヘキモノアリ少時間ノ視察中彼等ヲ捉ヘテ談話セシ處亦參考ニ資スヘキノ價値アルヲ以テ其ノ概要ヲ左ニ掲ク

本島ハ海驢獵ニ於ル一富場ニシテ獵者ハ陰曆四月中旬ヨリ七月中旬マテ駐住シ連日獵業ニ従事ス

海驢ヨリ得ル所ハ皮ト油トニシテ之ヲ大阪地方ニ送り毎年ノ獲得金額四千圓乃至五千圓ナリト云フ

目下獵夫ノ指揮ヲ司ルモノハ隱岐國中江養三郎ナルモノニシテ本人ノ言フ所ニ依レハ若シ志望者アラハ本年ハ冬季モ駐住シテ本島ニ越年ヲ試ムルノ志望ヲ有スト

海驢ノ外少量ノ鮑ヲ收獲スト云フ

氣候ハ夏季ニ於テ日中酷暑ヲ感スルモ朝夕ハ極テ涼冷ヲ覺ユ最炎暑ヲ感スルハ舊六月ナリトス又濛氣多クシテ降雨量ハ本土ニ比シ極テ少シ

附近潮流ハ北東流ナルカ如ク其ノ速力モ少カラス干満差ハ約四呎ナリ(報告者曰ク四呎ハ多キニ過クルカ如シト雖モ獵夫ノ言ニ隨フ故ニ姑ク疑ヲ存シ置ク)

本島ニハ薪水ナシ故ニ毎月一二回帆船ヲ以テ隱岐國トノ交通ヲ保チ糧食薪水其ノ他萬般ノ供給ヲ仰キ居ルト云フ
(別紙)

水分析表

| | | | |
|----|----|-------|-------------|
| 臭 | 無シ | 清濁及ヒ色 | 稍黃褐色僅微ノ浮游殘渣 |
| 鹽素 | 多量 | 石炭 | 僅微 |

| | | | |
|------|----|----|------|
| 安母尼亞 | 多量 | 硫酸 | 稍多量 |
| 亞硝酸 | 無シ | 硝酸 | 無シ |
| 有機物 | 多量 | 摘要 | 飲料不適 |

第七十一號 明治三十九年五月十九日舞鶴鎮守府望樓監督官海軍中佐淺野正恭ノ提出セシ戰役中望樓

ニ關スル調査事項

一、望樓ニ於テ通航船ノ方位、距離ヲ知ル爲メ採リシ方法

方位ハ海圖及ヒ風信器附屬方位盤ニ依リ距離ハ目測ニ依レリ

二、望樓ニ必要トスル測器、海圖、船名錄ノ類

測器ハ氣象觀測用ノモノヲ除クノ外視力完全ナル望遠鏡二個 雙眼鏡二個

輕便ナル距離測定器

海圖ハ望樓附近沿岸及ヒ日本總圖

船名錄ハ新版日本船名錄

三、時間ヲ正スニ採リシ方法

接續電信局ヨリ正午時ノ通知ヲ受ク

第七十二號 明治三十八年五月十五日武富第三艦隊司令官ノ提出セル對州南北兩端間ニ於ル通信速度

試驗報告

一、試驗ノ目的